



A4用紙で印刷すると、実寸サイズがご確認いただけます。  
※倍率100%の場合

# 目次

武蔵野 <small>むさしの</small> ……………	5
牛肉と馬鈴薯 <small>ぎゅうにくばれいしょ</small> ……………	47
酒中日記 <small>しゅちゅうにっき</small> ……………	91
号外 <small>ごうがい</small> ……………	165

武蔵野むさしの

「武蔵野の俤おもかげは今わずかに入間郡いるまに残れり」と自分は文政年間にできた地図で見たことがある。そしてその地図に入間郡「小手指原久米川こてさしはらは古戦場なり太平記元弘三年五月十一日源平小手指原にて戦うこと一日がうちに三十余たび日暮れは平家三里退きて久米川に陣を取る明れば源氏久米川の陣へ押寄せると載せたるはこのあたりなるべし」と書きこんであるのを讀んだことがある。自分は武蔵野の跡のわずかに残っている処とは定めてこの古戦場あたりではあるまいかと思つて、一度行つてみるつもりでいてまだ行かないが実際は今もやはりそのとおりであろうかと危ぶんでいる。ともかく、画や歌でばかり想像している武蔵野をその俤ばかりでも見たいものとは自分ばかりの願ひではあるまい。それほどの武蔵野が今ははたしていかがであるか、自分は詳わしくこの間に答えて自分を満足させたいとの望みを起こしたことはじつに一年前の事であつて、

今はますますこの望みが大きくなつてきた。

さてこの望みがはたして自分の力で達せらるるであろうか。自分はできないとはいわぬ。容易でないと思つて、それだけ自分は今の武蔵野に興味を感じている。たぶん同感の人もすくなからぬことと思う。

それで今、すこしく端緒たんちよをここに開いて、秋から冬へかけての自分の見て感じたところを書いて自分の望みの一少部分を果したい。まず自分がかの問に下すべき答は武蔵野の美び今も昔に劣らずとの一語である。昔の武蔵野は実地見てどんなに美であつたことやら、それは想像にも及ばんほどであつたに相違あるまいが、自分が今見る武蔵野の美しさはかかる誇張的の断案を下さしむるほどに自分を動かしているのである。自分は武蔵野の美といった、美といわんよりむしろ詩趣ししゆといいたい、そのほうが適切と思われる。

そこで自分は材料不足のところから自分の日記を種にしてみたい。自分は二十九年の秋の初めから春の初めまで、渋谷村しぶやの小さな茅屋ぼうおくに住んでいた。自分がかの望みを起こしたのもその時のこと、また秋から冬の事のみを今書くというのもそのわけである。

九月七日——「昨日も今日も南風強く吹き雲を送りつ雲を払いつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるるとき林影一時に煌めく、——」

これが今の武蔵野の秋の初めである。林はまだ夏の緑のそのままでありながら空模様が夏とまったく変わってきて雨雲あまぐもの南風につれて武蔵野の空低くしきりに雨を送るその晴間には日の光水気すいきを帯びてかなたの林に落ちこなたの杜もりにかがやく。自分はしばしば思った、こんな日に武蔵野を大観することができたらいかに美しいことだろうか。二日置いて九日の日記にも「風強く秋声野やにみつ、浮雲ふうん変幻へんげんたり」とある。ちょうどこのころはこんな天気が続いて大空と

野との景色が間断なく変化して日の光は夏らしく雲の色風の音は秋らしくきわめて趣味深く自分は感じた。

まずこれを今の武蔵野の秋の発端はつたんとして、自分は冬の終わるころまでの日記を左に並べて、変化の大略と光景の要素とを示しておかんと思う。

九月十九日——「朝、空曇り風死す、冷霧寒露、虫声しげし、天地の心なお目さめぬがごとし」

同二十一日——「秋天拭ぬぐうがごとし、木葉火のごとくかがやく」

十月十九日——「月明らかに林影黒し」

同二十五日——「朝は霧深く、午後は晴る、夜に入りて雲の絶間の月さゆ。

朝まだき霧の晴れぬ間に家を出で野を歩み林を訪う」

同二十六日——「午後林を訪う。林の奥に座して四顧し、傾聴し、睥視し、黙想す」

十一月四日——「天高く気澄む、夕暮に独り風吹く野に立てば、天外の

近く、国境をめぐる連山地平線上に黒し。星光一点、暮色ようやく到り、林影ようやく遠し」

同十八日——「月を踏んで散歩す、青煙地を這い月光林に砕く」

同十九日——「天晴れ、風清く、露冷やかなり。満目黄葉の中緑樹を雑ゆ。

小鳥梢に囀ず。一路人影なし。独り歩み黙思口吟し、足にまかせて近郊をめぐる」

同二十二日——「夜更けぬ、戸外は林をわたる風声ものすごし。滴声しきりなれども雨はすでに止みたりとおぼし」

同二十三日——「昨夜の風雨にて木葉ほとんど揺落せり。稲田もほとんど刈り取らる。冬枯の淋しき様となりぬ」

同二十四日——「木葉いまだまつたく落ちず。遠山を望めば、心も消え入らんばかり懐し」

同二十六日——夜十時記す「屋外は風雨の声ものすごし。滴声相應ず。今日

は終日霧たちこめて野や林や永久の夢に入りたらんごとく。午後犬を伴うて散歩す。林に入り黙坐す。犬眠る。水流林より出でて林に入る、落葉を浮かべて流る。おりおり時雨しめやかに林を過ぎて落葉の上をわたりゆく音静かなり」

同二十七日——「昨夜の風雨は今朝なごりなく晴れ、日うららかに昇りぬ。屋後の丘に立ちて望めば富士山真白ろに連山の上に聳ゆ。風清く気澄めり。げに初冬の朝なるかな。

田面に水あふれ、林影倒に映れり」

十二月二日——「今朝霜、雪のごとく朝日にきらめきてみごととなり。しばらくして薄雲かかり日光寒し」

同二十二日——「雪初めて降る」

三十年一月十三日——「夜更けぬ。風死し林黙す。雪しきりに降る。燈をかかげて戸外をうかがう、降雪火影にきらめきて舞う。ああ武蔵野沈黙す。